

## 家畜の自由：シガリョフ、大審問官の社会組織論

小嶋 祥三

『悪霊』の第二部第七、八章にシガリョフ（とピョートル？）の社会組織論が述べられている。それを読んだとき、共産主義国で起こった、あるいは起こっている社会、政治問題が予見されているように感じられ、驚いた。かれらの考えた社会組織を辿ってみる。

シガリョフは、スタヴローギン、キリーロフ、シャートフ、ピョートルも出席した会合で、同志とともに、かれが考えた社会組織、地上の樂園、について語る。それによると、無制限の自由から出発しながら、無制限の専制主義に到達する、という。すなわち、人類を 9/10 と 1/10 に分ける。フツーの人と選ばれた人である。1/10 は自由と 9/10 への無制限の権利を持つ。9/10 は 1/10 に服従し、人格を失しない、何代かの退化を経て、家畜の群れのようになる。これこそが地上の樂園である。シガリョフは家畜の飼い慣らし方なども考えたようだが、かれのノートのすべてを語るには 10 日が必要だという。

ピョートルは会合ではシガリョフの社会組織論を評価していないようだった。会合を抜け出したスタヴローギンを追っていったピョートルは、スタヴローギンをかれの計画に引きずり込もうと説得していた。その中で、ピョートルのシガリョフに対する積極的な評価が語られる。かれはシガリョフが「平等」を発明したという。ピョートルはシガリョフのノートを紹介する。シガリョフはスパイ制度と密告の義務を提唱した。全員が奴隷なので平等である。高度の能力を持つ者は権力を握るようになるので不要である。そのために教育や学術の水準を下げる必要がある。奴隷は平等でなければならないのだから、能力を持ったものは追放されるか処刑されねばならない。専制主義なしに自由も平等もあつたためしがないのだ！

どこかで聞いたような話である。1/10 の人たちは能力のある者を自分たちの仲間に入れたくないらしい。能力のある者は自分たちの地位を脅かす存在とみなされるようだ。結局、自分たち以外はすべて奴隷であり、家畜であることが好ましい。この考えを突き詰めれば、「自分たち」でなく、「自分」一人になる。権力闘争、粛清、個人崇拜、神格化の道だ。そして、知識人たちへの迫害。これらが起きたのは、それほど昔のことではない。いつか来た道だ。それにしても、家畜、奴隷の自由とは一体何だろうか。

ピョートルはスタヴローギンに、自分たちの運動、活動のために法王を担ぎ出したいという。そこでご登場を願うのが『カラマーゾフの兄弟』の大審問官である。大審問官は宗教的な立場からシガリョフ主義を語る。立場は革命理論家とカソリックの聖職者と異なるが、二人が語る社会組織は同じものである。シガリョフは同志から「いくぶん狂信的な人類愛論者」と評されているが、大審問官も「人類を愛する心は生涯変わらなかった」と作者イワンは述べている。劇詩「大審問官」はフツーの人々、神の失敗作に対する侮蔑に満ち満ちている。しかし、フツーの人々への侮蔑と愛は両立するのだろうか。「大審問官」では

家畜、奴隷の自由の問題が執拗に語られる。

「大審問官」はイワンが創作した劇詩で、悪魔がキリストに試みた三つの問いが核になっている（この点については、このホームページの『ドストエフスキーを読む』に書いたもので、読んでいただけたら幸いです）。キリストは自由、天上のパンを掲げて人々に教を説いた。大審問官はキリストの教を受け入れることができたのは僅かな、選ばれた人たちにすぎないと非難する。残りの多くのフツーの人たち、神の失敗作は困惑、混乱、不安の中に残されたと主張する。フツーの人たちが求めているのは地上のパンであり、かれらにとって天上のパンなど石ころにすぎない。かれらには自由は苦痛であり、重荷であり、恐ろしいものなので、地上のパンと交換して、一刻も早く心の平安を得たいと願っている。すなわち、フツーの人たちの自由とは「恐ろしい自由」からの自由のようだ。自由と地上のパンは両立しえないのだ。大審問官は悪魔とともに、キリストの名において、天上のパンである石ころを地上のパンにかえ、フツーの人たちを支配し、飼いならしてきたことを誇る。

大審問官は家畜をどのようにして飼いならしたかを語る。キリストがバラバラにした羊の群れを再び集め、われわれに従うようにした。かれらは無力で臆病な子供なのだ。われわれはかれらにパンを配り、自由のないかれらに代わってあらゆることを決めてやり、あらゆる問題を解決してやる。そうすれば、かれらはわれわれの知恵や力を恐れるようになり、われわれを賛美し、喜んで服従するようになる。これは地上の楽園だ。無論、かれらは働かなければならない。しかし、仕事がない時間には歌や踊りを楽しむように仕向ける。時には犯罪も、われわれが罪を被ることで、許してやる。そうすると、かれらは許されたことでわれわれに感謝し、崇拜し、服従するようになるのだ。マア、これらが欺瞞であることは分っている。かれら下司野郎には永遠の生などないが、われわれはそれを餌に無知なかれらを服従させているのだ。これはシガリョフが語る社会組織とウリ二つである。

人間はこのような社会に住むことを望むのだろうか。しかし、これらのことは実際に起こった。それは決して昔の話ではない。若い頃にエーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』という本を読んだことを思い出した（この本はナチズムに従っていった人々への批判だったが）。確か、「受容的になるな」と説いていたのを覚えている。